
ぬらりひよんの友～百鬼夜行と氷の羽～

まつたけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひよんの友〜百鬼夜行と氷の羽〜

【Nコード】

N9579V

【作者名】

まつたけ

【あらすじ】

氷を操る妖怪、“氷羽”。ある日道端で、百鬼夜行創設前のぬらりひよんと出会う。そして彼の一番最初の部下となり、共に百鬼夜行を作ろうと決意する。現在、牛鬼編前編が終了。修行編に入りま

す。

第一幕 ぬらりひょん、拾いました（前書き）

はじめまして。

初投稿の小説です。

まだまだ未熟者ですが、よろしければ見てやってください。

これはぬらりひょんの世代から始まります。

第一幕 ぬらりひょん、拾いました

「……あれ？ここどこだ？」

俺がなぜここにいるのか、そしてここはどこなのか？

うーん、確か俺、さっきまで楽しいお食事タイムだったのに…

俺の名前は“氷羽”、現役バリバリの妖怪だ。

名前のとおり、氷を操る妖怪“雪男”である。

一応言っておくが、猿ではない。猿とか言った奴は殴る！！雪女の男版と思ってくれたらいい。

特徴は…うーん何だろう？特に無いんじゃないかな？

見た目はどこにでも居るような普通の人……でも立派な妖怪だぞ！！！！

「……なんだ？」

俺はさっきまで弁当、ムシヤムシヤと食べていた。

その時に……

思い出した！！

確かものすごい風に飛ばされてここまで来たんだ！！！！

「しかし、ここはどこなんだ？」

しばらく俺はまっすぐに道無き道を歩いていた。

すると、前に何かが倒れていた。

……人だ。

俺はあんまりめんどろなことに関わらないようにしているが、周りに人陰が無い以上、助けられないわけにはいかない。

「大丈夫ですか？」

俺が声をかけると、その男は……

「……なぜか急に体が動かなくなっけしもうてのう、助けてくれんか？」

これが俺と奴の最初の出会いだった。

まあ仕方なくその男を起こし、背負った。

「俺は“雪男の氷羽”、お前は？」

俺が聞くと男は今にも死にそうな声で、

「……わしの名前は“ぬらりひょん”。……雪男？変わった妖じやのう、猿にでもなるのか？」

次の瞬間、俺はぬらりひょんを地面にたたきつけた

第一幕 ぬらりひょん、拾いました(後書き)

ちよつと自信ないです。

感想等、アドバイスなんかくれたらうれしいです。

・・・更新は遅いかも・・・

<次回>

「そば」を食べます。

第二幕 財布にお金があると思っていたけど、なかった時のレジでの緊張は波打いて、
題名長くてすみません

第二幕です。

第二幕 財布にお金があると思っていただけ、なかった時のレジでの緊張は波

ドオオオン

俺はぬらりひょんを思いっきり叩きつけた。

「何するんじゃ……いてて。」

「お前が猿とか言うからだろ！！俺は猿とか言われるのが一番嫌いなんだよ。」

するとぬらりひょんは、すまなさそうに、

「わりいこと言ったな、すまんかった。」

と誤ったので許してやった。

そうそう、人間は素直が一番、……俺たち妖だけどね。

そんなこんなで歩いてみると、そば屋を見つけたので入ることにした。

「そばなんて久しぶりな。ぬらりひょん、お前は？」

「……………」

「ん？どうした？」

俺が聞くと、奴は手をポンツ、と叩いて納得したように、

「おお、そうか、なぜか力が出ねえと思ったら、飯食うのを忘れていたんじゃ。」

……あきれた。こいつは馬鹿なのか？

しかし、うまそうに何杯も食べている姿をみて、俺も食べ始めた。

ズゾゾー

俺はすぐに一杯を食べきった。もう一杯食べたかったが、生活費が無くなるのでがまんした。

「じゃあお勘定を。」

「はい、合計_____でございます。」

あれ？そば一杯だけだかそんなしないはずじゃ……。

「え？おかしくない？そば一杯しか、「いいえ、お連れ様の分もですよ」、「ええ!!!」」

「連れならそこに……居ねえ!!!」

「では、_____いただきます。ありがとうございました」

俺の全財産が無くなる瞬間だった……。

第二幕 財布にお金があると思っていたけど、なかった時のレジでの緊張は波に

お気に入りが入りが二方も！！！！！！

ありがとうございます。

感想等、アドバイスがもらえるとうれしいです。

<次回>

「宇宙」に行きます（嘘）

第三幕 挑戦は成功への近道(前書き)

だいぶ遅くなってすみません(ーー；；)

これから毎話が短くなります。基本PSP投稿なので…。たまにP
C使って長く書けたらいいな

第三幕 挑戦は成功への近道

それから長い年月が立ち

―― 奴良組が完成した

「奴良組もだいぶ大きくなりましたね、総大将」

「しかし、あの牛鬼を仲間にできれば…」

総会でみんなが悩んでいる問題、それは『牛鬼』だ。

俺達（ぬらりひょんと俺の二人）はかつて牛鬼に挑んだことがあった。

そしてその結果、力が足らず返り討ちにあった。

これはその時の話だ。

「おい、ぬらりひょん、何をするつもりだ…?」

ぬらりひょんは、なぜか刀を持ったり食料をまとめていた。

「何ってその、アレじゃ!」

「いや、アレってなんだよ!」

長い髪を後ろに伸ばした二枚目の男が少し考えてから言った。

「アレじゃよ、百鬼夜行集めじゃ!」

「ああ、忘れてた、で? 誰を仲間にしに行くんだ?」

普通のどこにでもいるような男が聞いた。

「『牛鬼』じゃよ」

「いいぜ、でもどんな妖だ？」

「牛の鬼じゃねーかの？」

こうして、俺達はねじれ眼山に向かった。

——行かなければよかったと、俺は後で後悔することになった。

「おい、本当に大丈夫か？」

俺は不安になったが、

「ああ、ご近所じゃからの」

「いやいやそういう意味じゃなくてですね……」

なんて会話してたら着いた……

第三幕 挑戦は成功への近道（後書き）

…うん、やっぱり短いですねw w

— すみません m (| (m

<次回>

「ほら、一斉のでっ！！だ！」
突入します。というか不法侵入します。

第四幕 クラスには大抵「一斉ので！」詐欺がいる(前書き)

がんばっております)^^^(

第四幕 クラスには大抵「一斉ので!!」詐欺がいる

さて、ねじれ眼山に着いてしまった俺達。

眼の前には妖の大群：

「お、お、おいぬらりひよん。お前大将だよな？よしっ！ここは先陣を切って行け！」

氷羽がぬらりひよんを押しながら言った。

「い、いやいや氷羽君、大将は遅れて行くのが普通なんじゃ、さあさあ早く前へ！」

ぬらりひよんも氷羽を押しす。

「いやいやいや、大将こそ！」

「いやいやいやいや、ほらさ、部下は大将守らねえといかんじゃろ！」

睨み会う二人：

数十秒の沈黙の後：

「一斉のでっ！！で入ろう」

氷羽が提案した。

「いいぜ、やっぱみんな一緒じゃねえとな！」

向き合って笑う二人。

「一斉のでっ！！！」

そして俺達はねじれ眼山に第一歩を踏みいれ：

「オイイイイイ！！／／／／ぬらりひよん！なぜ入ってねえ！」

「あつちあつち」とぬらりひよんが指を刺した先は：

敵妖達で一杯だった！？

「貴様この山に無断で入るとは、いい度胸だな」

敵は一斉に俺に向かってきた。

「あの！違うんです！間違えてえええええ！！／／／／ごまかそうとしたが遅かった。」

俺は後悔した…

第四幕 クラスには大抵「一斉ので!!」詐欺がいる(後書き)

前よりいい出来かな？

またがんばります

<次回>

「いや、違う」
間違えます。

第五幕 氷羽の畏（前書き）

PSPって何で途中で書けなくなるのかな…？

更新がんばります

第五幕 氷羽の畏

「行けえええ!!」

牛鬼組の妖共が一斉に俺に襲いかかって来た。

しかし、

「ぐおおあああ!! / / / /」

妖共は次々と氷漬けにされていく。

「な、何だっ!? 全員、攻撃中止しろ!」

敵の幹部らしき妖が叫んだ。

シユウウウウ

冷気の霧が、辺りを取り巻く…

霧の晴れた中には、美しく透き通った氷の羽の生えた男が立っていた。

氷羽だ。さっきまでとは違い、髪は水色で瞳は赤く、両手から青い

妖気が出ている。

「どうした? 来いよ…」

氷羽はそう言った瞬間、超スピードで敵の群に突っ込んだ!!

そして、

「『氷舞一式・氷竜巻』!! / / / /」

雑魚共は氷漬けになり、一掃された。

冷気が辺りを支配する。

「なかなかじゃのう、氷羽。もう終わったんじゃねーか?」

「いや、まだみてーだぜ。」

そして真っ直ぐ見つめ、俺は言った。

「———— かるうじて避けたみたいだな…、貴様が牛鬼か?」

俺は指を差し、牛鬼を見つめた。

「……………いや、違う……。」
「……………」

——牛鬼じゃないみたいだ……

第五幕 氷羽の畏（後書き）

ねじれ目山の漢字出ねえ！

次もがんばります！

<次回>

「絶対牛鬼だよね！？」
オリキャラが登場します。

第六幕 発言して間違えたら恥ずかしい(前書き)

オリキャラ登場!!

がんばっているのですが…

第六幕 発言して間違えたら恥ずかしい

「な、な、何いいい!? / / / /」

俺は驚いて一瞬言葉を無くしたが、叫び声を上げた。

「本当に違うんだな!？」

「違う! ! 何度言ったら分かる!」

俺もぬらりひよんも「えっ? えっ?」となつてしまった。
なぜなら――

奴の外見は整つた顔立ちに鬼と牛を混ぜた様な角が生えていて、ついでに手から炎が出ていたからだ。

「絶対牛鬼だよね!？」

俺とぬらりひよんの声が八モる。

「だ・か・ら、違――う! ! ! ! ! ! !」

そう叫んでから、

「私の名は「炎妃鬼」、牛鬼様の側近だ! !」

「火? そうか! それで奴は氷羽の氷が効かなかつたわけじゃな?」

「そうらしいな! !」

次の瞬間、巨大な畏が姿を表した。

「…牛鬼」

俺は牛鬼の畏の巨大さに畏れた。

しかし、ぬらりひよんはというと…

「ほう、お主が牛鬼か!」

そして次の言葉を口にする。

「牛鬼や…、お主わしの百鬼夜行に入らんかのあ?」

まったく、こいつはこんな畏を見ても何とも思わないのかよ…

まあ、俺はアンタのそう言うところに引かれたんだがなw w

「…。」

牛鬼は無言のままだ…

そして口が開いた。

「ぬらりひょんとかやう、貴様はこのねじめ山で暴れて、私にそんな事をほざくのか」

第六幕 発言して間違えたら恥ずかしい(後書き)

おっと！ここで書けなくなりました。

ではまた次回です

第七幕 経験が実力を生む（前書き）

遅くなったかな？すみません…

そして、短くて駄文ですが、どうか宜しくおねがいます。

炎火鬼の名前を炎妃鬼にしました。読み方は同じです。

第七幕 経験が実力を生む

「ぬらりひよん、今すぐここから立ち去れ。そうすれば見逃してやるぞ」

牛鬼が警告？するが、ぬらりひよんは、

「わしは主が百鬼に入ってくれるまで帰らんつもりじゃぞ？」

「どうしてもと言うのなら、力づくで排除するぞ！ぬらりひよん！」
牛鬼を中心に畏が爆発した。

「覚悟しろ！ぬらりひよん！」

牛鬼はぬらりひよんを切りつけようと、刀を振る。

しかし、刀が当たる瞬間、ぬらりひよんが消えた！！

「！？」

「これがわしの畏、『明鏡止水』じゃよ…、牛鬼、わしの勝ちじゃ」

ぬらりひよんは、牛鬼の後ろに現れ、切りつけた。

「牛鬼様ああ！！！！」

炎火鬼が叫んだ。

寸での所で、刀を受けた。

「ぬらりひよん、認識できなくする妖…」

俺は独り言の用に呟いた。

ぬらりひよんはまた、消えた。

「消える、なかなかやつかいだ。しかし、まだ経験不足だ、ぬらりひよん」

「ひよん」

「ハアッ！！と叫ぶと、牛鬼は辺りを畏の刀で切りつけた。

ぬらりひよんの畏が断たれた。

「グハッ！？」

ぬらりひよんは体を真横に切りつけられた。

「おいっ！大丈夫かつ！！」

俺はぬらりひよんの前に駆け寄ろうとした、しかし…

「貴様の相手この私だ…」

俺の前に、炎火妃が立っていた。

第七幕 経験が実力を生む（後書き）

書けなくなっちゃいました…もう少し書きたかったのですが…

感想、質問、アドバイス、ダメだし、お待ちしております。

第八幕 炎は火の二倍の熱さだと思う（前書き）

がんばって書きます。

いつの間にやらお気に入りが五件に！！

もう感謝感激です。

第八幕 炎は火の二倍の熱さだと思う

炎火妃が火に包まれる。

そして、瞳が赤くなり、赤髪も長く延び、炎がうねる。

「貴様の相手はこの私だ！」

炎火妃は一瞬で間合いを積めると火を放ってきた。

「『火来』！！」

渦巻いた火が俺を襲う。

俺は羽で飛び上がり回避した。

しかし、

「くらえ！『火柱』！！」

下からいきなりの攻撃に反応出来なかった俺はまともに当たってしまった。

「ぐっ！！」

羽が溶け、落下した。

「やるじゃねえか……」

俺は炎火妃との間を詰め、一気に加速した。

「くらえ！『氷舞』——『邪魔じゃ！！』『ぬらりひょん！』」

牛鬼から逃げている最中のぬらりひょんが、俺の前に現れた。

そして、俺をさらに前へ蹴飛ばした。

「えええ！？」

俺はさらに加速し、技の体制をとれぬまま、炎火妃に突っ込んだ。

炎火妃も突然の加速に反応できず、二人はもみくちやになった。

そのまま、炎火妃を押し倒した。

もみくちやになったせいで、炎火妃の服が乱れ、胸元が露わになっている。

俺はそこに二つの膨らみがあるのに気がついた。

「な！？炎火妃！お前まさか……女なのか！？」

炎火妃は顔真っ赤にして、俺を睨み付け、

「ズンズンを見ている……」の変態っ……」
ゴオオオ……

第八幕 炎は火の二倍の熱さだと思う（後書き）

なんていい所で書けなくなるんだPSP!!

ははは…、なんだこれ、駄文じゃね？とこの話を読んで思った私でした…

第九幕 火にガソリンを注ぐとはこの事(前書き)

がんばります。

今お腹痛くて、トイレに隠りながら書いてます。はい、嘘です。

第九幕 火にガソリンを注ぐとはこの事

ゴオオオ!!

ものすごい畏だ…

「こ、こ、この変態下巢野郎が!!」

罵声と共に炎が飛んでくる。

「貴様だけはゆるさんぞ!!」

俺は避けて隙を狙う。

「『炎王・爆炎迅』!!」

次々とんでもない技が飛び出してくる。

少しの隙に、俺は一気に間合いを詰めた。

「あんたの技はかなり強力だ、しかし隙が多いぜ」

「!?!」

「くらいな、『氷舞二式・氷結晶』!!」

炎火妃は俺の畏に飲まれた。

(な、なんと美しい羽なのだろう…)

炎火妃の体が氷付いた。

「かつ、おめーもこんなふうに大人しければ可愛いのにな」

炎火妃に向かって言う。

「!!!ノノノき、貴様に言われても、うれしくなどない!!」

「はw、うれしいくせに…」

「な、な、何を言っている!?!だいたい私は…」

彼女の言葉を遮って、俺が言った。

「お前も来ないか? 奴良組に」

炎火妃は少しうつむいて、

「……か、考えて置く…」

かなり小さな声で呟いた。

「え? 何か言ったか?」

俺が聞くと、炎火妃は顔を真っ赤にして、

「な、な、何もいっておらん!! 貴様の組など行くわけないだろう
っ!! 汚らわしい!!」
かなり俺は炎火妃に嫌われたみたいだ…

第九幕 火にガソリンを注ぐとはこの事（後書き）

ああ、まただPSP！

感想、アドバイス、質問、ダメだし、誤字指摘、よろしくお願いします。

次回

大将戦です

第十幕 漫画のキャラって、しゃべりなら戦うよな？(前書き)

更新遅れました。

すみません

第十幕 漫画のキャラって、しゃべりなら戦うよな？

「さあ牛鬼、向こうは決着がついたみてえだぜ？」

ぬらりひよんが笑みを浮かべ、牛鬼にしゃべりかける。

「そうみたいだ…、こちらも蹴りをつけるぞ」

牛鬼が畏を放ち、ぬらりひよんに切りかかる。

ズバア！！

しかし、ゆらゆらとぬらりひよんが消え、後ろから現れた。

「何っ！？」

ズバア！！

ぬらりひよんが切りつけた

「…っ！！貴様、何をした！？」

牛鬼が聞いた。

「これがわしの、真・鏡花水月じゃ」

得意げなぬらりひよん。

「私もまだまだだ…、しかしぬらりひよん！まだ詰めが甘い。畏を

解いたな…」

次の瞬間、ものすごい速さで刀が振り降ろされた。

ズバアアーン！！

「…くっ！！なんて速さじゃ！太刀筋が見えん！」

ズバアア！！

ぬらりひよんが斜めに斬られた。

「ハア、ハア…、…ぐっ！！」

かなりの深手だ。服が赤く染まり、辺りに血が飛び散った。

不意に、ぬらりひよんが畏を放つ。

「！？」

牛鬼は唐突さに、気押された。

ゆらゆらとぬらりひよんの陰が揺れ、一人、二人、三人…、と数が
増える。

「な、何なんだこれは！」

牛鬼は畏れた。

「ウオオオオ！！！」

ぬらりひよんは突然牛鬼の前に現れ切りつけた。

ズバアア！

「…っ！？」

第十幕 漫画のキャラって、しゃべりなら戦うよな？(後書き)

ここまでしか書けなかった…
次は早めに更新したいです。

第十一幕 大将はやられてはいけない(前書き)

新年明けまして、おめでとございます。

今年もこんなぐだぐだですが、どうか宜しくお願いします。

第十一幕 大将はやられてはいけない

ドサツ

牛鬼とぬらりひよんはほぼ同時に倒れた。

「ハア、ハア…、牛鬼…。」

ぬらりひよんは途切れ途切れに話す。

「やっぱり、お主は…強い。わしも…、ハア、まだまだじゃな…。」

「だが…、次来た時は、ハア…、お主をわしの百鬼に加えてやる…。」
そしてぬらりひよんは気絶した。

「おーい、ぬらりひよーん！」

声の主、氷羽はぬらりひよんを見つめ、駆け寄った。

「おい！大丈夫か！？今から宿に戻るからな！」

氷羽はぬらりひよんを背負って歩き出そうとすると、

「待て…、私に止めをささないのか？」

牛鬼が聞いてくる。

すると氷羽は、

「刺さねえ。うちの大将は仲間にすると言ったからな、それに大将
がやられちゃ勝ったとは言えねえーよ。」

そう言っているとスタスタと歩きだした。

「牛鬼様！！すみません…、負けてしまいました。」
炎妃鬼が牛鬼に謝る。

「かなり強かったです、それに…」

「それに…？」

牛鬼が聞く。

「…いいえ、な、何でもありません！」

頬を少し赤らめ、炎妃鬼が言った。

「でも、次は負けません！」

「そうか…」

牛鬼は答えると、静かに眠った。

——空を見ると、夜が明け始めていた。

第十一幕 大将はやられてはいけない（後書き）

閲覧感謝です。

感想、質問、誤字指摘、アドバイス等、お待ちしております。

次回

修行編スタート

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9579v/>

ぬらりひよんの友～百鬼夜行と氷の羽～

2012年1月2日01時13分発行